〔論文〕

近代中国語の下限と現代中国語の上限について

陳　亦　文
大村芳昭

〈目　次〉

1．はじめに
2．中国語史の時代区分
　2．1．王力（1957）の区分
　2．2．呂叔湘（1985）の区分
　2．3．太田辰夫（1988）の区分
　2．4．蔣冀騁（1990；1991）の区分
　2．5．胡明揚（1992）の区分
　2．6．蔣紹愚（1994）の区分
3．量詞の視点からの時代区分
　3．1．動量詞“遭”から“趟”への変遷
　3．2．名量詞“株”から“棵”への変遷
4．他の品詞からの傍証
　4．1．基本動詞“喝”に関する研究
　4．2．“与”と“给”に関する研究
5．おわりに

1．はじめに

近代中国語と現代中国語の境界，つまり近代中国語の下限と現代中国語の上限について，学界ではまだ定着しておらず諸説がある．筆者は，陳亦文（2006）と陳亦文（2010）では，動量詞“趟”と名量詞“棵”の歴史的変遷について考察を行ったが，紙幅の都合で中国語の時代区分に言及することができなかった．本稿では，前述した２本の論文の研究成果を活用して，量詞の視点から近代中国語の下限を清代前期[(1)]の『紅楼夢』，現代中国語の上限を清代後期の『児女英雄伝』としたいと考えている．

したがって，本稿では，各研究者の時代区分を紹介した上で，量詞の視点から近代中国語の下限及び現代中国語の上限を区分することを試みようとする．さらに“喝”と“给”に関する先行研究を検証して，量詞以外のその他の品詞の視点からも筆者の論点を傍証したい．要するに，本稿での考察により近代中国語と現代中国語の境界を定める際の１つの手掛かりを提示できると考える．

2．中国語史の時代区分

中国語の歴史の時代区分について，学界では様々な説がある．ここでまず影響力のある中日両国の諸説を出版年代順に紹介しておきたい．

2．1　王力（1957）の区分

王力の『漢語史稿』（初版）が1957年に科学出版社より出版され，翌年の1958年に修訂版が出版された．王力の区分が早くも50年代に中国語の歴史を区分したことは画期的なものであり，大きな意義があり，後世に少なからぬ影響を与えたと言ってもよいだろう．王力は中国語の歴史を次のように区分している（王力（1958：35）参照）．

上古期：３世紀以前（３，４世紀は過渡期）

中古期：４世紀～12世紀（南宋前半）（12，13世紀は過渡期）

近代：13世紀～19世紀（アヘン戦争）（1840年アヘン戦争～1919年五四運動は過渡期）

現代：20世紀（五四運動以後）

王力のこの区分では，近代中国語の下限をアヘン戦争，現代中国語の上限を五四運動以後としている．アヘン戦争は1840年であって，つまり清代の道光年間なので，王力がいう近代中国語の下限は清代後期だと考えてよいであろう．

しかし，王力のこの区分は中国語の歴史ではなく，中国の歴史に照らしてされたのではないかという指摘もある（呂叔湘著・江藍生補（1985），胡明揚（1992），蔣紹愚（1994）参照）．

２．２　呂叔湘（1985）の区分

呂叔湘は，『近代漢語指代詞』の「序」と『近代漢語読本』の「序」で，中国語の歴史を次のように区分している（呂叔湘著・江藍生補（1985：１）と劉堅（1985：２）参照）．

古代漢語：～中唐（８世紀）

近代漢語：晩唐五代（９世紀）～現在（現代漢語は五四運動～現在であり，近代漢語の中に含まれている）

この区分では，現代中国語が近代中国語に含まれているという考え方であるが，より細かい分類では，近代漢語の下限を五四運動以前，現代中国語の上限を五四運動以後としている．細かい分類では，現代中国語の上限に関して，呂叔湘の区分は王力とほぼ同じであるといえよう．

２．３　太田辰夫（1988）の区分

日本において，中国語の歴史文法研究先駆者とも言われる太田辰夫は，1988年に出版された『中国語史通考』で中国語の歴史を次のように時代区分

している（太田辰夫（1988：３-４）参照）.

上古：第１期　商（殷）周，第２期　春秋戦国，第３期　漢

中古：第４期　魏晋南北朝

近古：第５期　晩唐五代，第６期　宋元明

近代：第７期　清

現代：第８期　民国以降

この区分では，近代中国語の下限を清末，現代中国語の上限を民国以後としている.

２．４　蔣冀騁（1990；1991）の区分

蔣冀騁の論文「論近代漢語的上限」は，学術雑誌『古漢語研究』の1990年第４期（68-75頁）と1991年第２期（72-78頁）に「上」と「下」に分けて掲載された．この論文は近代漢語の上限を詳しく論じるものであり，下限については詳しく論じていないが，中国語の歴史を次のように区分している.

上古：２世紀以前

中古：魏晋～中唐（２～８世紀末）

近代：晩唐五代～明末清初（９～17世紀）

現代：清末～現在（18世紀～現在）

この区分は近代中国語の下限を明末清初，現代中国語の上限を清末としている．氏は清代を清初と清末に分け，清中葉という言葉は使用していないが，おそらく氏が言う清初と清末は筆者が言っている清代前期と清代後期に相当すると思われ，氏の区分は近代中国語の下限が清代前期，現代中国語の上限が清代後期だと考えてよいであろう.

２．５　胡明揚（1992）の区分

胡明揚の論文「近代漢語的上下限和分期問題」は1991年に中国人民大学出版社により出版された『語言学論文選』（胡明揚著）に収録され，翌年の1992年に商務印書館により出版された『近代漢語研究』（胡竹安・楊耐思・蔣

紹愚編）にも収録された．２つの論文を比べると，多少の文字修正はあるものの，論点に大差はない．氏は中国語の歴史全体ではなく，主に近代中国語と現代中国語の区分を示している（胡明揚（1992：６）参照）．

近代漢語：隋末唐初～『紅楼夢』以前

現代漢語：『紅楼夢』～現在

胡明揚は王力の時代区分を大きく取り上げ，王力が『紅楼夢』の用例を元に『中国現代語法』を書いたのに，何故『紅楼夢』を現代中国語ではなく，近代中国語に入れたのか，疑問を呈している．つまり，王力の時代区分は中国の歴史の区分にしたがい，政治に翻弄されたのではないかと批判し，『紅楼夢』の会話文の言葉は現代中国語とほとんど同じだと主張しているのである．

２．６　蔣紹愚（1994）の区分

呂叔湘の二分法に対して，蔣紹愚の1994年に北京大学出版社より出版された『近代漢語研究概況』は，中国語の歴史を古代漢語，近代漢語，現代漢語の三分法を主張している．古代漢語が文言文系統であり，近代漢語と現代漢語が白話系統である．近代漢語と現代漢語の関係は密接しているにもかかわらず，両者を分けなければならないと述べている．近代中国語の上下限と現代中国語の上限について次のように区分している（蔣紹愚（1994：４-５）参照）．

近代漢語：唐初～清初

現代漢語：清中葉以後

蔣紹愚は『儒林外史』や『紅楼夢』の言語を現代中国語だと考え，近代中国語の下限を清初，現代中国語の上限を清中葉以後としている．

以上６名の研究者の時代区分をまとめると，近代中国語の下限については，王力が清代後期，呂叔湘が五四運動以前，太田辰夫が清末，蔣冀騁が明末清初（清代前期），胡明揚が『紅楼夢』以前，蔣紹愚が清初となる．最も

早期は蔣冀騁説である．現代中国語の上限については，王力と呂叔湘が五四運動以後，太田辰夫が民国以後，蔣冀騁が清末（清代後期），胡明揚が『紅楼夢』以後，蔣紹愚が清中葉以後となる．最も早期は胡明揚説と蔣紹愚説である．近代中国語の下限と現代中国語の上限に限って言えば，筆者の区分と近いのは 4 番目の蔣冀騁（1990；1991）の区分である．つまり，清代前期（清中葉）の『紅楼夢』を近代中国語の下限，清代後期（清末）の『児女英雄伝』を現代中国語の上限としている．

3．量詞の視点からの時代区分

陳亦文（2006）と陳亦文（2010）では，動量詞“趟”と名量詞“棵”を取り上げ，その歴史的な変遷を詳細に多方面にわたり検証した．以下，具体的に要約する．

3．1　動量詞“遭”から“趟”への変遷

明代までの白話小説において，移動動詞と共起し往復する回数を表す動量詞には主として“遭”が用いられていたが，やがて“趟”に取って代わられるようになった．“趟”の来源及び歴史的変遷については先行研究がほとんど見られない．わずかに太田辰夫（1958：160-161）に，“下”“遍”“回”などに比べて，「《次》や《趟》は時代が下る」とあり，“趟”の使用例として『紅楼夢』が挙げられているにとどまる．また向熹（1993：381）には，近代に新しく発生した動量詞の 1 つとして，“趟（蕩）”が挙げられ，用例として，『金瓶梅詞話』（表記は“蕩”），『西遊記』（表記は“趟”），『紅楼夢』（表記は“趟”）がそれぞれ 1 例ずつ記述されている．

陳亦文（2006）では，動量詞｛趟[2]｝が『金瓶梅詞話』には 1 例，『西遊記』には 2 例出現しただけではなく，『三宝太監西洋記』には 6 例もの用例があるので，｛趟｝は明代に出現したと指摘した．｛趟｝は出現した当初から“tàng”という音であったが，意味的には移動動詞と共起し，往復する回数

を表すだけでなく，一般動詞とも共起し，動作の回数のみを表すこともできた．しかし，現代中国語の“趟”は専ら移動動詞と共起するので，{趟}（tàng）は明代に発生した後，明代から清代にかけて継承される過程において，意味的な面では明らかに『紅楼夢』『飛龍全伝』などの北方系作品の口語に偏る傾向を示した．

さらに，表記に関しても，以下のことが判明した．①明代の表記はすべて“盪”である．②清代前期には明代の“盪”を受け継いだ作品もあるが，『紅楼夢』になると，変化が見られる．つまり，抄本では10種類，程本では５種類の表記があるが，これらの諸本が作られた時代を順に並べると，淌→鞜→趟→趟という大きな流れになり，最終的に民国10年代に至り今日の“趟”という表記に定着した．なぜ表記にこのような変遷が見られたのか，またなぜ“趟”という表記に統一されたのか，その理由について以下のように考えている．

{趟}の意味に変化が見られた以上，本来の表記“盪”を使用するのはやはり無理があったと考えられる．そこで，『紅楼夢』あたりから表記が揺れ始めて，そして試行錯誤された結果，“趟”が選ばれたのである．しかし“tàng”を表記する際，意味的に“趟”という文字が適当であるが，音韻的には不都合があった．その際，中華民国建国当初の「国語」政策つまり政府が一定の力を発揮して，すでに世に通じていた俗の言い方を行政的に採用して遂行したと推測できる．民国以後，“趟（tàng）”が共通語として北京から各地に広がり，現在に至っているのではないかと思われる．しかし，今なお，閩方言，客家語などは，まだその影響を受けていないようである．

３．２　名量詞“株”から“棵”への変遷

中国語では，植物を数えるのに“株”とともに，{棵}[(3)]という語が“株”よりやや遅れて使われ始め今日に至っており，“株”は方言に残り，後発の{棵}は共通語の語彙に入っている．{棵}の最初の姿としての“科”“窠”は集合量詞としてわずかではあるが，前漢・北魏に出現し，個体量詞として

は敦煌変文，唐五代筆記小説の『酉陽雑俎』などの唐代に，そして“棵”という表記は明代の『金瓶梅詞話』，馮夢龍が関わった“三言”に初めて出現したことを明らかにした．清代前期の『紅楼夢』になって“棵”の使用頻度が“株”と同じ程度になり，そして清末の『児女英雄伝』で完全に“株”を大きく上回った．

さらに，“科”“窠”“顆”が“棵”に統一された理由について以下のようにも考えている．“科”“窠”はもともと「穴」という意味なので，植物の集合量詞として使われていた．植物を数える“棵”が登場したとき，集合量詞の音を継承して，“断木”の意味を持つ“棵（胡管切）”という今日の字音とは異なる文字が使われた．“棵”が意味的に植物の個体量詞として相応しいが，音韻的に不都合があった．今日の字音が伝統的な字音に取って代わったのは中華民国建国当初の「国語」政策つまり政府が一定の力を発揮して，すでに世に通じていた俗の言い方を行政的に採用して遂行した結果であると推測できる．民国以後，“棵（kē）”が共通語として北京から各地に広がり，現在に至っているのではないかと思われる．しかし，今なお，贛方言，客家語，粤方言，閩方言などは，まだ共通語の影響を受けていないようである．

２つの量詞の考察を通して，量詞の歴史的変遷の１つの類型を明らかにした．つまり，一部の量詞は表記が不安定だったことから，これは清代前期に北京語を取り入れたという証拠だといえよう．そして，この北京語を取り入れる際，音韻上の不都合がある場合，中華民国建国当初の「国語」政策つまり政府が一定の力を発揮して，すでに世に通じていた俗の言い方を行政的に採用して遂行した結果であると推測できる．これは恐らく量詞だけではなく，他の品詞にも及ぶ現象だと思われる．

4．他の品詞からの傍証

4．1　基本動詞“喝”に関する研究

基本動詞“喝”と“吃”（「ノム」の意味）について，大島吉郎（1989；1990；1991；1992；1993；1994；1995）の一連の論文がある．

大島吉郎は，“喝”及び“喝”の前身の使用例については，次の表１で示している（大島吉郎（1991：213-214）参照）．

表１　“喝”及び“喝”の前身の使用例

《大广益会玉篇》	歃　　欲（哈）
《广韵》	歃　　欲
《集约》	歃　　欲　哈
《类篇》	歃（嗑）欲（哈）
《宋本・六臣注文选》	欲
《云麓漫钞》	哈
《鸡肋编》	哈

《元刊杂剧三十种》	喝
《梨园按试乐府新声》	喝

《永乐大典戏文三种》	喝
《西游记》	喝
《金瓶梅词话》	呵
《元曲选》	喝
《脉望馆钞校本古今杂剧》	喝

《醒世姻缘传》	喝呵
《聊斋俚曲集》	喝
《聊斋白话韵文》	哈
《儒林外史》	喝　嗑

《红楼梦》甲戌本	喝
己卯本	喝呵
庚辰本	喝呵歃
甲辰本	喝
列藏本	喝
戚序本	嗑
舒序本	喝
蒙府本	喝　嗑
梦稿本	喝
程甲本	喝

《朴通事谚解》	欲
《清文启蒙》	喝呵
《通俗编》	（欲）哈
《方言类释》	哈
《正音撮要》	哈
《正音咀华》	呵
《大清文典》	喝
《官话类编》	喝
《京音字汇》	（喝）歃

氏の論文において，本論文と関係がある論点をまとめると以下のようになる．

・“喝”が現われる以前の派生過程は次のように考えることができよう．

欲→哈→歃→喝

・“喝”が漢字表記として文献の上に現われるのは，王力の明代以降説に対して，元代以降説の提唱を試みた．ただ，『元刊雑劇三十種』にあるわずかな例，元代の用例数が多くないことなどから，「元代以降」説成立の可能性を強く示す用例とするにとどめることにしたい．

・元代や明代の各資料に“喝”のわずかな用例と違って，『紅楼夢』の〈前80回〉で“喝”の用例が急激に増えた（全部で84例．うち53例が会話文中に用いられている）．〈後40回〉で“吃”と急激に交替した．

・“喝”の北方語への定着の過程は大よそ以下の如くまとめることができる

であろう．

a.『紅楼夢』成立以前

b.『紅楼夢』脂本成立段階〈前80回〉

c.『紅楼夢』程甲本成立段階〈後40回〉

d.『紅楼夢』程乙本成立以降〈前80回〉

語彙史を考える上で，特に北方方言の語彙に大きな変化を生ずる局面を見ようとする場合，上記のプロセスは１つのモデルとして方法論の一部に加えることが可能であるように思われる．

大島吉郎（1994）は，『紅楼夢』の〈前80回〉における“吃”と“喝”の書き換えに関する具体的な状況を表により示しているが，筆者は，この表及び論文の中のその他のデータに基づいて，以下の表２を作った．

表２　『紅楼夢』における“吃”と“喝”

程甲本（1791）	前80回	後40回
吃	200例前後	20例ほど
喝	84例（53例が会話文の中）	120例以上

程乙本（1792）		前80回	後40回
書き換え	吃→喝	66例	１例
	饮→喝	3例	０例
	ϕ→喝	4例	０例
	喝→ϕ	1例	０例
	喝→吃	0例	２例
吃		134例前後	21例ほど
喝		156例	119例以上

さらに，清代後期の作品『児女英雄伝』における“吃”と“喝”の使用状況については，大島吉郎の論文では言及されておらず，他の研究者のデータもないため，筆者が調査を行った．その結果を次の表３で示す．

表３　『児女英雄伝』における“吃”と“喝”

吃	27例
喝	220例

表２と表３のデータを見ると，仮に高鶚が付け加えた『紅楼夢』〈後40回〉を除き，曹雪芹により書かれた『紅楼夢』〈前80回〉だけを見るなら，程甲本においては“吃”が優勢であり，程乙本においては“吃”と“喝”が併用されているのが分かる．しかし，『児女英雄伝』になると，“喝”が“吃”に取って代わり，完全に優勢になったといえる．つまり，大島吉郎の動詞“喝”に関する研究を見ても，量詞と同じように，清代前期の『紅楼夢』では“吃”が優勢であり，或いは“吃”と“喝”が併用されているが，清代後期の『児女英雄伝』では“吃”が“喝”に取って代わられた形になっている．

４．２　“与”と“给”に関する研究

李煒（2002）では，まず“给”と“与”の用法を次の５つに分けている．

１．“给”，“与”在動詞中的表現（“给”，“与”の動詞としての用法）

２．“给”，“与”在介詞中的表現（“给”，“与”の前置詞としての用法）

３．“给”，“与”在“V_1 给／与 N_2”和“V_1 给／与 N_2 N_3”中的表現（“给”，“与”の“V_1 给／与 N_2”と“V_1 给／与 N_2 N_3”における用法）

４．“给／与”在兼語句中的表現（“给／与”の兼語文における用法）

５．新興用法中只有“给”没有“与”（“与”にはなく，“给”の新しい用法）

さらに，上記の５つの用法について，『紅楼夢』〈前80回〉，『紅楼夢』〈後40回〉，『児女英雄伝』における使用状況を考察している．筆者はこの考察の結果を表４にまとめた．なお，区別するために表の中で上記５つの用法をそれぞれ①②③④⑤で示した．

表４　“与”と“给”の５つの用法[(4)]

	『紅楼夢』前80回	『紅楼夢』後40回	『児女英雄伝』
動詞“与”	①29③186④22＝217例	①１③18④０＝19例	①０③０④０＝０例
動詞“给”	①218③74④53＝345例	①66③45④42＝153例	①91③108④95＝294例
前置詞“与”	②67⑤０＝67例	②14⑤０＝14例	②２⑤０＝２例
前置詞“给”	②112⑤３＝115例	②156⑤２＝158例	②622⑤26＝648例

氏は結論のところで次のように述べている．

“从上面五部分所列事实及分析中我们可以看到，从《红》前80回到《儿》，‘给’无论作动词，介词还是作弱化动词整体上都呈现出不断发展壮大的趋势，‘与’则在整体上都后退萎缩。到了《红》后40回时‘与’已全面丧失了与‘给’的竞争能力，到了《儿》时‘与’已基本上被‘给’取代。在此之后动词，介词‘与’就从现代白话口语中全面消失了。”（上記挙げた５つの事実と分析から以下のようなことが分かった．『紅楼夢』〈前80回〉から『児女英雄伝』まで，“给”は動詞の用例にしろ，前置詞の用例にしろ，弱化動詞（結果補語）の用例にしろ，全体的にだんだん拡大される傾向が見られる．一方，“与”は衰退傾向を呈している．『紅楼夢』〈後40回〉になると，“与”は“给”との競争力を全面的に失い，『児女英雄伝』になると，ほとんど“给”に取って代わられたのである．その後，“与”の動詞と前置詞が現代白話の口語から姿を消したのである．――筆者訳）

上記の李煒（2002）を見ると，仮に高鶚が付け加えた『紅楼夢』〈後40回〉を除き，曹雪芹により書かれた『紅楼夢』〈前80回〉だけを見るなら，清代前期の『紅楼夢』〈前80回〉では“给”がやや優勢であるが，“与”と“给”がほぼ併用されている．清代後期の『児女英雄伝』では“给”が“与”に取って代わった形になっている．

筆者は中国語の時代区分を，近代中国語の下限を清代前期の『紅楼夢』，

現代中国語の上限を清代後期の『児女英雄伝』と主張した．しかし，量詞だけでは説得力に乏しいと考え，上記の２例の研究では「上限」,「下限」に触れてはいないが，本稿の結論との比較を試みた．その結果，中国語の時代区分においては筆者の論点と合致しているといえるであろう．

５．おわりに

中国語の時代区分に関してはまだ定着しておらず諸説があり，区分する際大雑把すぎると思われる．大量の個別の語彙や文法を取り上げて，その傾向性を見出すのが一番適当な方法ではないかと考える．小稿はその試みである．

清代の社会は基本的に明の制度を取り入れながら国政を整備していったとよく言われているが，漢民族が支配した明代と違って，清代は北方から来た異民族である満州族が中国を支配した王朝であった．最初は明代の漢文化に傾倒したとしても，政権がしっかりと握られた後，特に康熙帝・雍正帝・乾隆帝の三代に清代の最盛期を迎えた清代中期以後は，北方遊牧民族の文化や言葉がたくさん取り入れられたとされている．したがって，明清時代は文化の中心が南から北への移転時期であり，言葉の規範も南方から北方（北京）へと移ったといえよう．当然，この時期の言葉の使い方も北方の口語をたくさん取り入れたのではないかと推測できる．

筆者は，量詞の視点から近代中国語の下限及び現代中国語の上限を区分することに貢献できると考える．

［注］

⑴　清代（1616年～1909年）を清代前期と清代後期に分ける二分法以外に，清初，清中葉，清末に分ける三分法もある．『紅楼夢』は乾隆年間にできた作品（最も早い版本は1754年）なので，本研究が依拠する前者の分け方では清代前期の作品，後者の分け方では清中葉の作品になる．

⑵　以下，｛趟｝を用いて現代語の“趟（tàng）”につながる語を表す．異表記

を含む．

⑶　以下，{棵} を用いて現代語の“棵（kē）”につながる語を表す．異表記を含む．

⑷　李煒（2002）は３番と４番を“弱化動詞”と呼んでいるが，現在一般的には“結果補語”と呼ばれているので，ここでは動詞の中に入れた．そして５番は前置詞の用法なので，前置詞の中に入れて計算した．

［参考文献］

大島吉郎（1989）「‘喝’に関する若干の問題ー早期資料と《红楼梦》を中心にー」，『中国語研究』（中国近世語学会）第30号：pp. 28-39.

〃　（1990）「‘喝’に関する若干の問題（二）ー早期資料と異体字を中心にー」，大東文化大学『語学教育研究論叢』第７号：pp. 97-105.

〃　（1991）「‘喝’に関する若干の問題（三）ー清代における資料を中心にー」，大東文化大学『語学教育研究論叢』第８号：pp. 206-217.

〃　（1992）「‘喝’に関する若干の問題（四）ー‘欲’‘哈’を中心にー」，大東文化大学『語学教育研究論叢』第９号：pp. 101-115.

〃　（1993）「‘喝’に関する若干の問題（五）ー《金瓶梅词话》を中心にー」，大東文化大学『語学教育研究論叢』第10号：pp. 25-36.

〃　（1994）「‘喝’に関する若干の問題（六）ー《红楼梦》程甲本・程乙本の比較を中心にー」，『語学教育研究論叢』（大東文化大学）第11号：pp. 1-19.

〃　（1995）「‘独吃自呵’考」，大東文化大学『語学教育研究論叢』第12号：pp. 127-134.

太田辰夫（1958）『中国語歴史文法』．東京：江南書院．

〃　（1969）「近代漢語」，『中国語学新辞典』（中国語学研究会）：pp. 186-187．東京：光生館．

〃　（1988）『中国語史通考』．東京：白帝社．

中国語学研究会（1958）『中国語学事典』．東京：江南書院．

〃　（1969）『中国語学新辞典』．東京：光生館．

陳亦文（2006）「白話作品に見る動量詞｛趟｝ー使用方言検証のマーカーとしてー」，『中国語学』（日本中国語学会）253号：pp. 171-191.

陳亦文（2010）「名量詞“棵”的歴史変遷」，『漢語史研究集刊』第13輯（四川大学漢語史研究所・四川大学中国俗文化研究所）：pp. 80-98．成都：巴蜀書社．

胡明揚（1991）「近代漢語的上下限和分期問題」,『語言学論文選』：pp. 246-256. 北京：中国人民大学出版社.

〃　（1992）「近代漢語的上下限和分期問題」,『近代漢語研究』（胡竹安・楊耐思・蔣紹愚編）：pp. 3-12. 北京：商務印書館.

蔣冀騁（1990）「論近代漢語的上限（上）」,『古漢語研究』（湖南師範大学）第 4 期：pp. 68-75. 長沙：古漢語研究雑誌社.

〃　（1991）「論近代漢語的上限（下）」,『古漢語研究』（湖南師範大学）第 2 期：pp. 72-78. 長沙：古漢語研究雑誌社.

蔣紹愚（1994）『近代漢語研究概況』. 北京：北京大学出版社.

李煒（2002）「従《紅楼夢》《児女英雄伝》看“給”対“與”的取代」,『蘭州大学学報　社科版』第 4 期：pp. 135-140.

劉堅（1985）『近代漢語読本』. 上海：上海教育出版社.

呂叔湘著・江藍生補（1985）『近代漢語指代詞』. 上海：学林出版社.

王力（1958）『漢語史稿（修訂本）』（上冊・中冊・下冊）. 北京：科学出版社.

魏紹昌（1982）『紅楼夢版本小考』. 北京：中国社会科学出版社.

向熹（1993）『簡明漢語史（下）』. 北京：高等教育出版社.